

空

平成25年6月20日発行

第11巻3号

通巻第49号

空



2013・6

**SORA** 49号

# 一滴

柴田 佐知子

鮎上る岸の緑を力とし

暗がりを神は好みて椎の花

菖蒲湯に浮かんでゐたる赤ん坊

一滴に形代は紅強くせり

田を重ね島の高まる夏の蝶

水中花ひとりで泣いて気が済みし

奥宮の暗さ貝母の花活けて

不幸など数ふる気なし桐の花

あの頃と言へば通ずる涼しさよ  
わけもなく走る雄鶏瓜の花  
水叩きしぶきよろこぶ日焼の子  
蛸壺に安堵の蛸を引きずり出す  
飼犬の戻つてきたる出水あと  
さにあらず汗の眉間をなほ狭め  
どうしても足が日傘の影を出る  
麦の秋ひとりで入る納骨堂  
浴衣着て合せ鏡に母が居り  
僧坊はすべて消えたり著莪の花  
白昼やすくめば蛇が首立つる  
陣形を教はる夏野見下ろして  
神々の峰より瀧となりて落つ

初夏 高倉和子

屈託のなき頃のこと花なづな

対岸の人なつかしき春焚火

春の夜鏡を拭けば魔女のゐる

岩越えてふくらむ川や仏生会

花冷やいよいよ母の爪堅し

花疲れもとの話に戻りけり

竹林の中のひだまり聖五月

初夏の雨すぐ上がる故郷かな

青山椒 中田みなみ

捨てられし首持ち上げて葱坊主

御いこう桜神さま色を差し忘れ

鶏もする影踏みごっこ新樹光

僧の子の摘む斉膳の青山椒

夏草や少年小さき櫛を持つ

気まぐれな雨に日の射す青山椒

郭公と同じ水呑み地図を見る

秩父セメント山

木菟鳴くやうすすうす白き石切場

たそがれ 荒井千佐代

棧橋よりすぐに野道や青き踏む

菜の花や照らし合ひゐる海と空

磔像の肋骨春の埃かな

恰好の朧夜ならむ密会す

命終を惚けちらしてチューリップ

亀鳴いて血縁問はれぬたりけり

矢車や一湾に日のゆきわたり

沖よりの風のまつすぐ柏餅

長々と灘のたそがれ白牡丹

水の春 服部早苗

日付のみありて空白涅槃西風

語る間もなく白木蓮の散りにけり

畑打の遠くゐるのみ迷ひ道

灯ともりてつくづくひとり春の鴨

春雨の夜雨のたてる音かすか

逃水や助手席に夫居ればこそ

花時の墓石に刻む文字白し

丹田に力あつめよ水の春

春暖炉

柴田志津子

難解な仏典配る彼岸寺

工房の煤け薬缶や山笑ふ

睦毛より老いゆく神馬花は葉に

異国語のとび交ふ埠頭春二番

塩田の跡ひろびろと揚雲雀

青梅のひとつつころがる枡秤

もてなしの惜しみなく焚く春暖炉

粽解く子も還暦となりにけり

白神

だいじみどり

橡の花日の射す中を散りにけり

夫と聴く白神岳のほととぎす

水筒に満たす湧水峠みち

壁に挿す二人静も茶室かな

山開き終りしリュック五能線

白神のつんつん咲いて橡の花

はやばやとねむりにつける山の蝶

登山者へ白神岳の起伏かな

鳥帰る

野 上

はるか  
杏

みちのくの減らぬ瓦礫や鳥帰る

春濤打つ何もなかつたかのやうに

咲き満ちて幹の黒ずむ桜かな

花冷の白さそのまま耳たぶに

吹いて飲む牛乳の膜花曇

光りつつ弾みつつ落つ春の瀧

二坪に満たぬ磯畑茎立てり

踏台置く海辺のポスト燕来る



糸田 宮井 知英

古墳への道のぬかるみ鳥交る  
石塊となりたる古墳草萌ゆる  
眠さうな昼の月あり花の山  
三軒の山の集落えごの花  
石棺に絹の糸屑黄砂来る

熊本 亀井 紀子

あたたかや医師に見惚れて胸開く  
春陰や痩せてしまひし千羽鶴  
街のもの集めてゆきぬ鴉の巢  
しばらくは耳傾けて山清水  
碾てんがい磑たいがいは挽き手を待てり花南天

千葉 原友子

灯ともりて家遠くなる植田かな  
ソーダ水夢に翼のありしころ  
滝落つる音にはるけき丈ありぬ  
母の忌の納経帳の汗の染み  
夜濯ぎの音天涯の宿更けて

山梨 野畑 さゆり

前山に雲ひろがりぬ土筆籠  
久女忌に遅き楊貴妃桜かな  
共に老ゆるはらかなのをり春障子  
武田節踊り果てたる春祭  
草餅や母は九十越えられず

福岡 あさなが捷

看病ののちの安らぎクレマチス

かへりみれば何の怒りか夕螢

山風の途切れし真夜や髪洗ふ

川風に尾を尖らせて鯉幟

猛獣が火の輪をくぐる夏の昼

福岡 矢野百合子

額ほどの種床囲み神事待つ

梢より雀の囀す御田植祭

芽柳や船は岸辺にまだ眠り

白秋の生家も雛の家となる

おきあげの雛となりて浮かれたき

福岡 山内 碧

神々の愛憎あらは春一番

山は野を野は空を見る春日かな

黒板に先づは名を書き新教師

行く春や朝餉の卵黄身二つ

説法に笑ひの種も彼岸寺

熊本 松田 明子

青空に急かされ梅のひらきけり

飛石づたひに案内されたる雛座敷

蜷の道乱さず水の過ぎにけり

大手門より遠足の散らばり来

つばくらや街道沿ひの戦の碑

# 空作品評

柴田佐知子

春陰や痩せてしまひし千羽鶴

亀井 紀子

「春陰」は桜が咲くころの曇りがちな天候のこと。「花曇」よりもやや心象の色合いを濃く感じる。時が過ぎたのであろう。ふつくらとした千羽鶴が自らの重さに細り色も褪ぜはじめている。「痩せてしまひし」に写生の奥の作者の屈託も感じられる。

杜若一人暮しは潔し

小林 朱夏

一人暮しといえば、淋しいとか侘しいという言葉を連想することが多いかもしれない。ところが朱夏さんは「潔し」と言う。この断定がいい。全てを自分で采配し、すつきりと生きてゆく。家の中もきちんと片付いていそうだ。句を貫くスピードと切れ味が小気味よい。且つ上五に置かれた季語「杜若」が、清冽な水の響きのような品格を句に与えている。

忘るるはいつものことよ春の雲

高倉恵美子

年齢を重ねると忘れやすくなる。興味の薄い事柄

から忘れてゆくのだという人もいるが、老いを自覚させられる現象の一つだ。まあそれも自然の摂理：そして「春の雲」と詠む。このように詠む大らかさは若々しい。

一点に止まる風のみつまらなし

戸栗 末廣

童謡に「お正月には風揚げて：」とあるので、風は新年の季語と思いがちだが、歳時記の分類では春に属する。その論拠が（榎本好宏「季語の来歴」）に書かれていた。それによると風のルーツは中国にあり、紀元前二〇〇年代の戦いの際に作られたとか、漢の宮城との距離を測るためとか、風に提げた籠に乗って戦に利用したなど諸説がある。また自然との関係にも意味を持たせて、揚げた風の糸が切れて飛び去ることを放災（ファンツァイ）と読んで災いを放つと考えたそうだ。中国では立春から清明までの六十日間を風揚げの季節としている。また俗信では風を司る神が清明を過ぎると天に帰ってしまうので、清明を過ぎて風を揚げると災いに遭うとされてきたという。

寄り道が長くなったが、掲句に移ろう。最初はなかなか風に乗らず挺子摺ることもあるが、高く揚がると安定してくる。「つまらなし」には、風を捉えるまでの風揚げの面白さがうかがわれる。「一点に

とどまる風」も的確な表現だ。

死にし蛾の燐光 一夜の道

湯村 葉

夜の道と蛾の燐光以外の景は全て消え去る。他の命の気配はない。この句がもたらす冷たく妖しい静寂の映像美に惹かれる。

恋路とや行きつくところ 蝮蛇草 矢野百合子  
黒塗りのベンツに乗りしバラの束 今井 春生

一句目、「恋路とや」とはまた大層な詠み出しである。その果てが蝮蛇草となると、この恋路に影が差す。人形浄瑠璃の道行きなどを思わせる。二句目のバラは赤だと勝手に映像化してしまった。どちらも組み合わせられた言葉が読む者の想像力を刺激する。

囀りへ紙飛行機を放ちけり えとう樹里

紙飛行機を飛ばしたというだけのことであるが、「囀へ」によって一気に瑞々しい詩へと変貌している。単純にして鮮明な句である

葉桜や乳飲み児の時短くて 仲里 奈央  
鶯や結へば子の髪なほ光る 乾 有杏

子育ての最中に居られる奈央さんと有杏さん。一、二才で子供が離乳することは誰でもが知っていることだ。子供の髪が艶々していることも同じ。掲句はそれらを正確に表現している。正確ということとは、それを見る作者の感受が正確ということだ。

袋の絵ほどは望まずトマト植う 片田 きく

私も昨年トマトを蒔いた。種袋にはルビーのようなミニトマトが房状に実っていたが、私もきくさんと同じ思いだった。案の定、ほどほどの収穫であった。言葉に無理をさせず見事に日常の些事を掬い取っている。そのほか次の作品にも注目した。

初蝶や水に溺るる低さまで 山田 正子  
春愁や灯れば窓に人の影 小川 涼  
眺め良き場所は断崖花とべら 栗原 京子  
寺門よりすぐの山路や竹の春 伊東 孝子  
路を剥くうちに煩惱遠ざかる 山口 弘子  
二階から眺むる沖や暮の春 井手本恭子  
春昼の何つかまんと赤子の手 天谷 翔子

# 空集

柴田佐知子選

一点に止まる風のつまらなし

兵庫 戸栗末廣

鴨引いてしまひし風の湿りかな

涅槃図に雨だれの音小止みなし

蛇出でて風上に舌使ひをり

野を焼きしその夜の雨のしづかなる

クレソンの水あをあをと流れけり

重なりて山深まりぬ雛祭

兵庫 織田高暢

ひなの夜は雛と話して伯母卒寿

桃咲いて異界より来し孔雀の眼

こゑありとせば囁きか霞草

咲き満ちて根の國までも花の冷え

死者生者酒酌み交はし花筵

死にし蛾の燐光一つ夜の道

大牟田 湯村 栞

淵のぞき鰐になるなり蜥蜴の子

よそ行きの袖重なりて雛の膳

春の燈の本閉ちてなほ残りけり

岸壁のむず痒くなる春の潮

千葉 原 友子

山藤の咲けば山見て子守唄

雉子鳴くや風いさぎよき朝の畦

眠る蝶あやふき夢に揺らぎしか

葱坊主前もうしろも葱坊主

薫風や展示機関車を咲かせ

赤ん坊が口をへの字に桃の花

糸田 宮井知英

落椿命果てたるとは見えず

夕永し泣きたい時は泣くことに

田を植ゑて炭坑ありし地の沈み

大釜の据る筍祭かな

火櫛は発心の色桜の実